

集団的自衛権行使容認の閣議決定

JJ1SXA/池

与党内議論が延々と続き、ようやく、閣議決定に至ったようだ、与党内議論の中身は、我が国の自衛権には、行使できる自衛権と行使できない自衛権がある、しかも、行使できる自衛権にも、歯止めが必要だとの議論だ、何かおかしい、行使できない権利は存在しない、行使できるから権利では無いか？

公明党は、選挙区で、支持者に説明するためのアリバイ作りをしているだけでは無いか？それほど反対なら、すぱっと連立を解消すれば良い、自民党も連立解消がそんなに怖いのか？真の国防論などはどっちでも良いのか？

疑問だらけだ、国際的には通用しない議論が展開されているような気がする、元統合幕僚会議議長の西元徹也氏が、6月25日付読売新聞で次のように指摘している。

…「集団的自衛権の行使がようやく認められても、現状と大差がない『元の木阿弥』にならないかと危惧」される。…と。

…我が国の存続と不可分のシーレーンは、広大な海の上にある。

それは、インド洋、マラッカ海峡、東西5,000キロのインドネシア海域、南シナ海、東シナ海、そして我が国を取り巻くパラオ、グアム、サイパンを含む西太平洋だ。

この広大な海域の「航行の自由」に我が国の存立が懸かっている、ここが我が国の個別的自衛権行使の領域である。

しかし、この広大な海域を一国で守ることは困難であり、また一国で守ろうとするべきではないと思う、我が国と同じように、この海域の「航行の自由」に国の存続がかかる政治理念を同じくする周辺諸国との連携、即ち、インド、アセアン諸国、オーストラリア、ニュージーランド、台湾そしてアメリカとの連携と協働によって、この海域の「航行の自由」が確保されるべきだ、そして、この諸国との連携と協働の具体的なあり方こそ、相互の集団的自衛権の行使なのだ。…と、西村慎吾氏は語る。

自民党は、公明党との意見の摺り合わせで、本筋からどんどん離れていったのでは無いか、西元徹也氏が指摘した通り、「元の木阿弥」では無いか。

ちゃんと本筋に戻してもらいたものだ、そして本命の憲法改正に進んでもらいたい、例によって、朝日新聞等は、反対のキャンペーンを行うだろうが…

格調高かった、同紙の「天声人語」も、社の方針だろうが、一方の意見を堂々と掲げる政治論が多い、質が落ちたと言わざるを得ない、「素粒子」に至っては、三流週刊誌並みの内容、大朝日も、反日を掲げることで落ちるところまで落ちるのか、時の政権を鋭く批判するつもりが、単に反日になっているのに気付かないようだ。

(1.Jul,2014 記)